

# 三重の登録有形文化財（前編）

県内には、歴史的・景観的に貴重な建造物が数多く存在しますが、近年ではその建造物を単に保護するだけではなく、幅広く活用しながら継承しようという機運が高まっています。国（文化庁）が制定する「登録有形文化財」もこうした考え方から始まりました。

今回は、県内の「登録有形文化財」の中から、6か所ご紹介します。

\*各登録有形文化財の開館日時・受け入れ方法・料金などはそれぞれに異なり、変更になる場合もありますので、必ず事前にご確認ください。

取材・文…中村真由美・中村元美  
撮影…梅川紀彦・尾之内孝昭

ただし※印の写真は取材先から提供していただきました。



## 地域の独自性を守り、活用することで後世に伝える

緑青色のプレートを掲げた「登録有形文化財」は、国が保存と活用のために必要なものとして文化財登録原簿に登録された有形文化財のことです。平成8（1996）年に、制度が導入されました。

登録制度の対象となるのは、建築後50年を経過した建造物。住宅・事務所・寺院などはもちろん、橋・水門・トンネル・煙突など幅広く数多くの文化財を対象としています。広く親しまれています。そこでしか見られない珍しいものなどが、その資格を持つています。

保護のため許可などの強い規制を受

ける「指定文化財」は、その活用方法がもっぱら公開であるのに対し、「登録有形文化財」は届出と指導・助言・勧告を基本とするゆるやかな制限のため、カフェやレストランなどの商業施設や宿泊施設、地域住民の活動の場など、いろいろな用途に活用することができます。

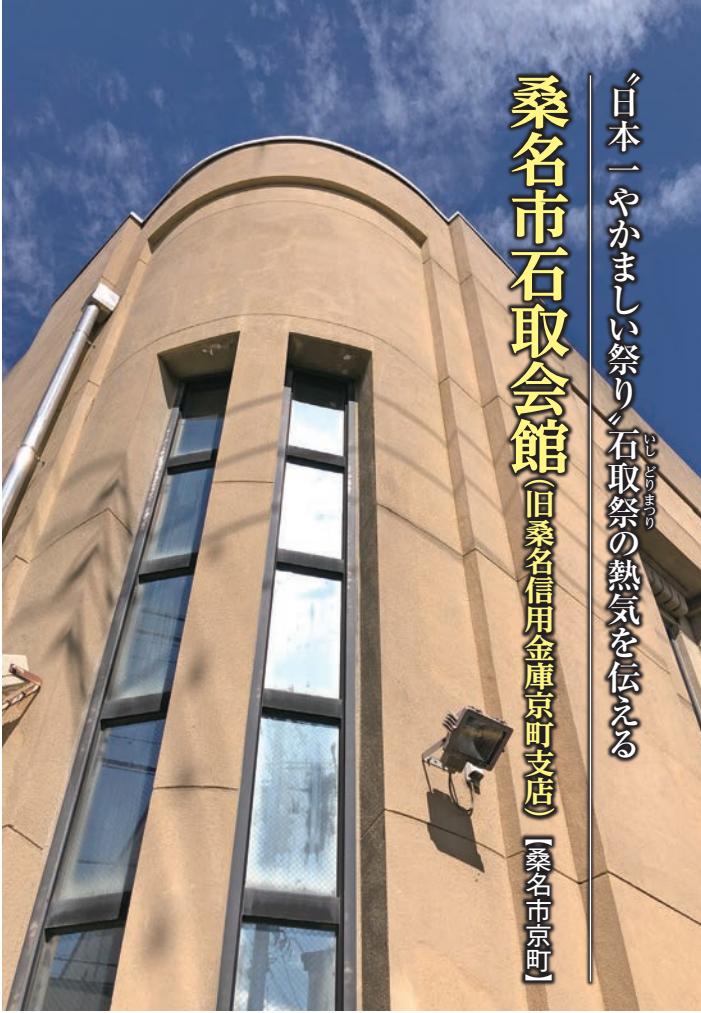
平成29（2017）年、「みえ登録有形文化財建造物友の会（会員数58名）」（愛称「さんとうぶん」）が設立されました。歴史的建造物の所有者、また建築士や学識経験者が一緒に活動を行う組織です。「こうした動きは、全国の都道府県で8番目。その価値を見出して保存し、まちづくりや「コミュニティの拠点、観光資源として活用していく」と、いち早く立ち上がりました。

「阪神・淡路大震災以降、歴史ある建造物を見直す活動が盛んになりました。資産として、また文化として活かし、ゆるやかに守つていこうという発想です」と、「さんとうぶん」の事務局長であり、三重県文化財保護指導委員の岩見勝田さん。歴史的建造物の保全活用に関わる専門家であるヘリテージマネージャーの育成にも携わっています。現在、ヘリテージマネージャーは県内に116人ほどいますが、地域の人々と連携しながら地域文化活性化の一翼を担う人材として活躍しています。

「登録有形文化財」のトレーディングカードも作成しました。カードを集めることで、文化財に関心を持つ人も増え、地域で親しまれてきた古い建物こそ見直そうという気運が高まっています。

日本一やかましい祭り「石取祭」の熱気を伝える

# 桑名市石取会館(旧桑名信用金庫京町支店)【桑名市京町】



丸く縁取られた角部分と縦長の窓が印象的な「桑名市石取会館」外観

庫の本店を経て京町支店として使用されました。平成3(1991)年に桑名市に寄贈されると、翌年に「桑名市石取会館」(入館料無料)として開館。以来、「石取祭」の情報発信拠点としての役割を担っています。

館内に入ると、まず目に飛び込んで

きたのは、天井まで届きそうな高さの祭車です。「石取祭」は、各町から曳き出された約40台の祭車が練り歩く祭り

ですが、町ごとに趣向を凝らした祭車が勢揃いするのは、壯観な眺めでしょう。続いて祭車の後方に視線を移すと、

太鼓と鉦が吊るしてあるのに気付きます。太鼓の大きさは直径約80センチメートル、鉦の直径は約50センチメートル程度です。これらが「石取祭」が「日本一やかましい祭り」と称される所以。

太鼓や鉦を打ち鳴らすお囃子の音が「ゴンゴン、チキチキチン、ゴンチキチン…」と街中に鳴り響くのです。

「桑名の子どもたちは、お母さんのお腹の中にいる間から、お囃子の音を聞

東海道の宿場町であると同時に、城下町・港町として発展した桑名旧市街地には、「六華苑」「九華公園」「七里の渡し跡」など、多彩な歴史・文化施設が存在し、充実した散策が可能です。この中で、少し趣を異にするのが「桑名市石取会館」でしよう。2階建て鉄筋コンクリート造りの建物ですが、角部分が丸

く縁取られているため、温かみが感じられます。一見するとシンプルな外観ですが、窓の上部などに装飾が施され、細部にまで神経が行き届いていることが伝わります。

同館が竣工したのは、大正14(1925)年。当初の役割は、四日市銀行の桑名支店でしたが、その後、桑名信用金

いているためか、小さなお子さんでも平気で寝ているといわれるほどです」と教えてくれるのは、桑名市産業振興部の観光文化課で学芸員を務める久保田恵友さん。久保田さんの勧めで館内の「お囃子体験コーナー」で実際に鉦をたたいてみると、想像以上に難しく、リズムを取るのがいかに大変かを実感しました。拍子は、主に五つ拍子と七つ拍子があり、違いを聞き比べるのも醍醐味だと伺いました。

春日神社に清らかな石を奉納する行事から始まり、現在の莊厳・華麗な祭車



江戸時代末期に製造されたと伝わる  
漆仕上げの祭車



鉦のたたき方を実演する久保田 恵友さん



「石取祭」\*

## お問い合わせ

桑名市産業振興部観光文化課  
TEL 0594-24-1361  
「桑名市石取会館」  
(月曜・木曜日休館) ※7月から8月の  
祭礼終了までは、木曜日開館)  
TEL 0594-24-6085

龟山市立白川小学校

南棟・北棟

もう一つの特色は、昭和29(1954)年に建てられた校舎が木造だということ。北棟と南棟の2棟が平行して建っていますが、いずれも木造平屋

運動会では、保護者や卒業生・老人会なども参加するのです。そこには、学校は地域の「核」であり、子どもたちは「宝」だという共通の想いがあることを伺いました。



南棟の正面中央の玄関ポーチ

明治32（1899）年の創立以来、120年の歴史を有する龜山市立白川小学校には、いくつかの特色があります。その一つは、市内で唯一「小規模特認校」に指定されていること。これは、規格の学校区外であつても、一定の条件を満たせば、特別に同校への入学・転学を認めるというもの。平成31（2019）年4月現在、14人の児童が利用しています。

が漂い、懐かしさも加わって心が和むのを感じました。また、教室の窓が2段構えになつていて、想像以上に天井が高いことに気が付きます。これは、風通しをよくすることと、採光のためだと教わります。

亀山市立白川小学校  
TEL 0595-82-3007



## 木の温もりが伝わる廊下



襖を取り外して広々と利用

それ以前の詳しいことは定かではありません」と中六のご主人、中元弘さん。屋号は、参拝者のお世話をする御師の「中六太夫」が由来となっています。御師は祈祷(きとう)を行う神職で、明治4(一八七一)年に制度が廃止されるまで活躍しました。

建物は瓦屋根の存在感が引き立つ入母屋造。角地に建つため、道路側の2面ともに起り破風を持つ妻入りが独特の雰囲気で、参拝でにぎわった往時の風格を

（71）年に制度が廃止されるまで活躍しました。

志摩市で初めての登録有形文化財が、磯部町にあるうなぎ処の「中六」です。平成23（2011）年に登録されました。伊勢神宮内宮の別宮である伊雑宮の門

前に店を構え、昭和50年ごろまでは旅館を営んでいました。「江戸時代には宿として存在していて、先祖の墓石こは

前に店を構え、昭和50年ごろまでは旅館を営んでいました。「江戸時代には宿として存在していて、先祖の墓石には1700年代のものがあるのですが、

合させて、昭和4(1929)年まで中六も店舗の建て替えを行つていきました。広々とした玄関は旅館としての名残。1階は厨房や控室として使われ、2階が客間です。中廊下を介して8畳の和室が続き、落ち着きのある空間となつて います。高欄を取り付けた窓は大きく、開放的な外観は当初の面影のままであります。

木造の建物を使っていくコツを尋ねると「毎日窓を開け閉めするので風通しはよいでしょうが、普段通りです。今のことろ大きな修理はないですね」と中さん。日々、参拝者や地元客を迎えることが、維持管理にも役立つてい るようです。

お問い合わせ

中六

賢島のシンボルが再び息を吹き返す

# 旧猪子家住宅

主屋・土蔵・門柱

[志摩市阿児町]



付書院の細工にも品格が漂う



洋間に置かれた机は当時のもの



さりげなく、どっしりと構える門柱



室内装飾にアーティスト作品を活かす

の建物の先駆けとして、猪子家は地域の規範となつたことでしょう。

猪子家の文化財は住居だけではありません。主屋の西側には、2階建てで寄棟屋根の土蔵が建ち、敷地への入り口に建つ門柱は、主柱の上に笠石を載せ、側面を瘤出し仕上げとしたもの。派手さはないものの、街路の景観に重厚感を持たせています。

2800坪の敷地は、起伏がある緑豊かな自然林。散策する小径も竹内さん夫婦が整備してきました。「ツバキや

栗の木、季節毎に花や実を付ける樹木に昆虫や鳥が集まつてきます。海もすぐ近くで、木が若かつたころは当然莫れません。主屋の西側には、2階建てで寄棟屋根の土蔵が建ち、敷地への入り口に建つ門柱は、主柱の上に笠石を載せ、側面を瘤出し仕上げとしたもの。派手さはないものの、街路の景観に重厚感を持たせています。

2800坪の敷地は、起伏がある緑豊かな自然林。散策する小径も竹内さん夫婦が整備してきました。「ツバキや

保険会社各地の支店長などの要職を歴任した猪子彌平氏が、退職後の住み家



平成29(2017)年、活用プロジェクトが評価され、ウッドデザイン賞を受賞

として選んだのが、賢島の地です。昭和9(1934)年に英虞湾を見下ろす高台の南斜面に私邸が建築され、時を経て平成25(2013)年、志摩市在住の竹内和彦さん、千鶴さん夫妻の所有となりました。

「何度も修理されていましたが、設計図はないんです。玄関の屋根は倒木で壊れ、床もシロアリなどで痛んでいたので、古い写真を元にサッシも木製建具に戻しました。ほかも復元をめざして手を入れてきたので、ほぼ当時の姿です」と文化財登録にも関わった東原建築工房の東原達也さん。外壁

は防虫、防腐効果もある日本古来の漆墨塗で、黒壁を再現。システムキッチンに改装されていた台所は、それ以前の三和土土間を家族や友人とつくり出し、建物の価値や使い勝手のよさを高めています。「外観の大きな変更や移築の場合には文化庁への届け出が必要ですが、修繕や改築の自由度が高く、何より幅広い活用を考えられるのが、登録有形文化財の特徴です」と、東原さん。

主屋は木造平屋建て。張り出した玄関と台所部分それぞれに、入母屋の屋根が架かり、変化のある外観です。内部は和洋の意匠を併せ持ち、当時の建築技術を垣間見ることができます。和室は格式ある床の間、付書院、欄間に松竹梅などの彫刻が施され、洋間には漆喰塗壁、見上げれば漆塗り仕上げの格天井の洒落た空間で、猪子氏は書斎として使っていたようです。

賢島は戦後に伊勢志摩国立公園となり、保養地としての利用が進み別荘やホテルが建設されました。和洋折衷として使っていたようです。

を考えると同時に、維持していくために利益を生む手段も模索しています。

文化財は保存するだけでなく、活用されることが重要。活用は公開によりその価値を共有するだけでなく、建造物を使い続けることが大切です。その効果としてまちづくりやコミュニティの拠点としての地域貢献が期待されています。

## お問い合わせ

竹内 千鶴さん

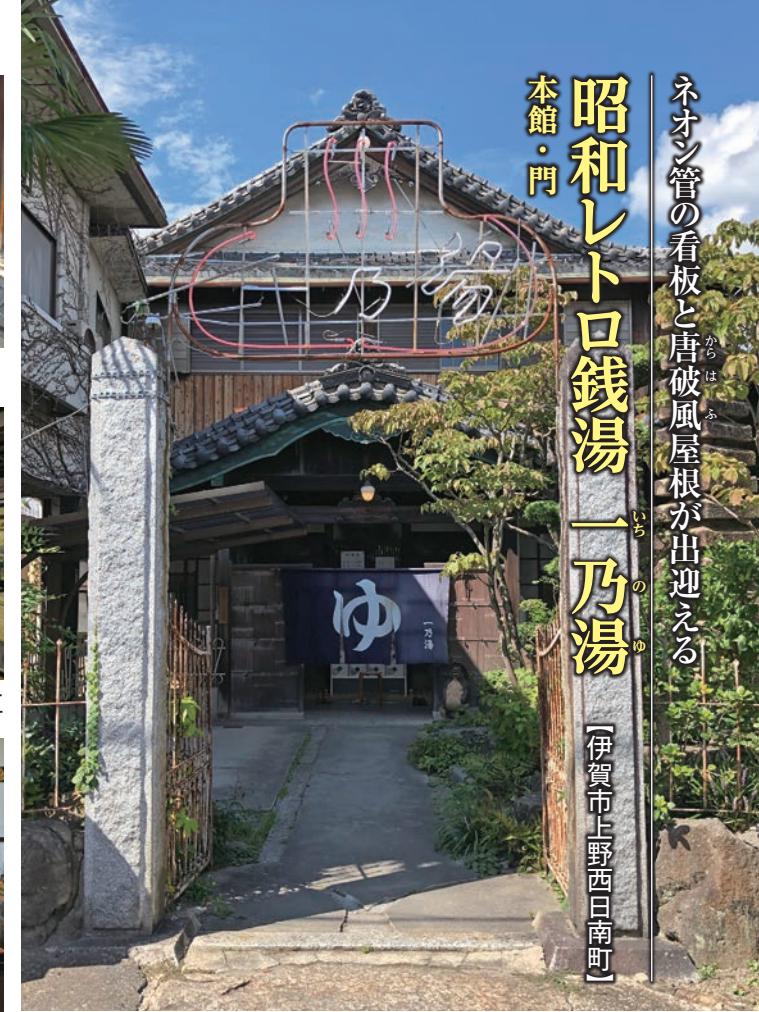
TEL 090-11824-2724

ネオシ管の看板と唐破風屋根が出迎える

# 昭和レトロ銭湯 一乃湯

本館・門

【伊賀市上野西日南町】



古き良き時代へタイムスリップ

すぐつと端正な石の門柱に、屋号を掲げたインパクトのあるネオン管も創業時のもの。城下町の一角にある「昭和レトロ銭湯 一乃湯」は、近所の常連のみならず、遠方からもファンや観光客が訪れるほど人気の銭湯。伊賀上野の2軒ある銭湯の一つですが、かつてこの町には20軒ほどが営業していたようです。建物は大正15(1926)年の建築で、当時は「草津湯」という屋号でした。一乃湯3代目、中森秀治さんの祖父が、昭和25(1950)年に購入し、改装しながら現在に至っています。

本館は曲線状の屋根様式である唐破風とすかし飾りの設えで、気分を盛り立ててくれます。



下駄箱には木札の鍵が付く



折上格天井と透かし彫りの細工



レトロな昭和グッズが並ぶ



風呂用品と和の小物が並ぶ



腰掛ける段差があるのは関西風



イベントも行う「イチノユプラス」

土地の雰囲気に一番触れ合えるのは、銭湯ではないでしょうか。旅気分も味わえます。ほかの地域に出掛けたときに銭湯を見つけたら、ぜひ入ってみてください」と中森さん。

銭湯は、戦後から昭和40年代にかけて繁盛し、最盛期には全国に2万軒近くあつたそうです。後継者不足や経営難で今では10分の1ほどに減少していますが、独特の生活文化を築いてきました。

昔ながらの趣のある一乃湯は、今も昔もコミュニケーションの拠点。まちなかの社交の場として存在しています。そんな思いは銭湯の中だけにとどまらず、隣接する建物を交流の場になればと「イチノユプラス」としてオープンさせました。また銭湯前の通りを「コトコトこみち」と名付け、移住者や店舗の呼び込みにもつなげ、新たなぎわいを見せてています。

湯加減は地元客好みに合わせて温度設定をしています。決まった時間帯に掛け湯をすれば、見ず知らずの客同士が、その周りに腰掛けられるよう段が設けてありますが、ここに座つて会話をすると、同じ面々といつもの会話をすることが、常連の楽しみ。お

清潔感あふれる館内は、至るところに細かな気配りが感じられ、ショップカードやイベントチラシがまるでギャラリーのよう。中森さんがセレクトした書籍も並び、湯上りに読書にふける人もいます。そして番台前は風呂敷や下駄、アルマイトの風呂桶など銭湯グッズの売店コーナー。「手ぶらセット」には二ツクシャンプーと石鹼が付いています。

湯加減は地元客好みに合わせて温度設定をしています。決まった時間帯に掛け湯をすれば、見ず知らずの客同士が、その周りに腰掛けられるよう段が設けてありますが、ここに座つて会話をすると、同じ面々といつもの会話をすることが、常連の楽しみ。お

清潔感あふれる館内は、至るところに細かな気配りが感じられ、ショップカードやイベントチラシがまるでギャラリーのよう。中森さんがセレクトした書籍も並び、湯上りに読書にふける人もいます。そして番台前は風呂敷や下駄、アルマイトの風呂桶など銭湯グッズの売店コーナー。「手ぶらセット」には二ツクシャンプーと石鹼が付いています。

湯加減は地元客好みに合わせて温度設定をしています。決まった時間帯に掛け湯をすれば、見ず知らずの客同士が、その周りに腰掛けられるよう段が設けてありますが、ここに座つて会話をすると、同じ面々といつもの会話をすることが、常連の楽しみ。お

清潔感あふれる館内は、至るところに細かな気配りが感じられ、ショップカードやイベントチラシがまるでギャラリーのよう。中森さんがセレクトした書籍も並び、湯上りに読書にふける人もいます。そして番台前は風呂敷や下駄、アルマイトの風呂桶など銭湯グッズの売店コーナー。「手ぶらセット」には二ツクシャンプーと石鹼が付いています。

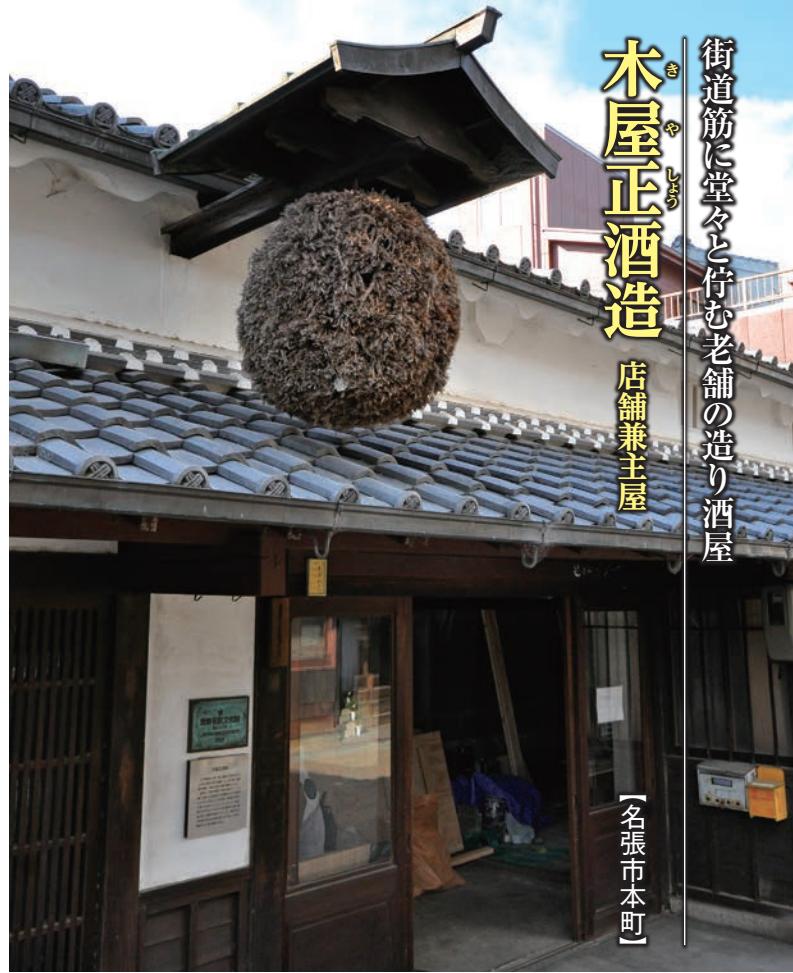
お問い合わせ

【昭和レトロ銭湯 一乃湯】  
TEL 0595-21-1126

# 木屋正酒造

店舗兼主屋

【名張市本町】



200年になる酒造を6代で受け継ぐ

奈良から伊勢へと向かう初瀬街道沿いで、大きな杉玉が目印となっている「木屋正酒造」。漆喰塗りのつし部分に虫籠窓を穿つ、老舗の造り酒屋らしい風格で、古い町家が建つ本町筋の象徴的な存在となっています。杉玉の看板屋根

の梁に記された墨書きから、店舗兼主屋は、明治22（1889）年の建物であることがわかつています。瓦などのメンテナンスを繰り返し、使われてきました。木屋正酒造5代の大西武夫さんは、「伊賀盆地は朝夕の寒暖差が大きく、

夏は暑く冬は冷える気候とあって、酒造りに最適の環境です。近くを流れる名張川の伏流水で、酒を仕込んでいました。木屋正酒造は文政元（1818）年の創業ですが、江戸時代に栄えた造り酒屋、木平家の「ほていや」を、材木商であった大西庄八が譲り受け、屋号を「木屋正」と改めました。店舗兼主屋の軒瓦には、大西家の家紋である「違い鷹の羽根一つ引」が施されていますが、倉庫や酒蔵には木平家の「三つ桜」の家紋がそのまま残され、2つの蔵元の変遷が読み取れます。

広い間口から入ると、飴色に輝く柱や壁。そして大きな框が座敷へとつながり、床の間や欄間に施された細工からは、客人を迎えるための高貴な落ち着いた雰囲気が漂ってきます。飾られている「群鶴図屏風」から、建築当時の華やかさも想像できます。客間から見える中庭は、名張藤堂家邸の庭を模したものだといわれ、池の横に建つ灯籠

が目を引きます。

創業時から造り続ける銘柄の「高砂」で、伊賀地方を中心にも商いをしてきた木屋正酒造ですが、現在は蔵元であり杜氏の6代目、大西唯克さんが平成17（2005）年に「而今」を立ち上げ、幅広く展開。平成28（2016）年に開催された伊勢志摩サミットでは、三重の地酒として首脳陣の食事や乾杯に使われ、全国的にも注目を浴びています。「酒造りの一切を取り仕切るのが杜氏。日本酒は複雑な工程で造られるため、かつては技術者である杜氏が契約した



軒瓦に「違い鷹の羽根一つ引」



普段から応接間として使われる



客間から眺める池に鯉が泳ぐ



蔵に住み、1シーズンの酒造りを請け負っていましたが、今や次世代を背負う若手が先端技術と伝統をコラボし、トレンドイーなお酒を創造しています」と武夫さん。日本各地の歴史の古い酒蔵が減少しつつある今、時代に合わせ、品質重視の酒造りをめざしています。

酒造りに欠かせない土蔵は築200年となり、当時の姿を残しています。「名張・まちづくりの会」で文化財登録に関わった岩見勝由さんは「蔵は酒造りに集中するため、登録物件からははずされていますが、酒造業や歴史を知る

## お問い合わせ

「木屋正酒造」

TEL 0595-163-0061